

〈中本正智博士 著書紹介〉 『日本語の原景 ： 日本列島の言語学』

加治工, 真市

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

68

(終了ページ / End Page)

71

(発行年 / Year)

1995-02-24

『日本語の原景 —日本列島の言語学—』

加治工 真 市

本書は、大学の国語学、方言学、言語学等の教科書、または参考書として1981年3月、金鶏社から出版された。全編254ページで、国語学や言語学、方言学で扱う領域を独自の語り口でまとめた優れた教科書である。「日本語の原景」というタイトルから、歴史言語学か、日本語の系統論に関する専門書のイメージを抱かせるが、内容的には「国語学概論」としてまとめられていると言えるであろう。

全体を9章で組織だてていて、第1章「言語とは何か」、第2章「言語研究の2つの方向」、第3章「音声から音韻へ」、第4章「語彙と意味を考える」、第5章「言語表現と文」、第6章「方言の世界」、第7章「日本語系統論の諸学説」、第8章「琉球列島語の系譜」、第9章「日本語研究の歩み」の緒テーマを設定して、日本語を多角的に分析し、解明しようとしている。これだけの領域を一人で扱うのはかなりしんどい作業であって、それ故に本書が出版されたということは、著者が円熟したことを示すものと思われる。

第1章の「言語とは何か」のテーマを追及するに当たって著者は、第1節「社会の中の言語」、第2節「言語の特質」、第3節「言語変化の要因をさぐる」、第4節「音声言語と文字言語のちがいを配置する。第1節では、人間が社会の成員として生活していく上で不可欠な言語を獲得し、形成していく過程を展開しながら、「言語のすがた」を「外形と内容がそれぞれ高度な組織をもちつつ統一されたもの」と説く。言語の外形とは音声であり、物理的、生理的、感覚的、心理的要素がからみあった存在とし、内容とは音声によって表される事や物で、その指示関係は社会的なものに属し、これが言語の意味であると説く。この考え方はソシュールの言語記号論そのものであり、それを著者は独自の語り口でランゲージュからラング・パロールへと展開している。この節を著者は単なるソシュールの祖述で終らせず、言語を「社会的・文化的コンスキストの中で」判断すべきことを力説した点、特徴的である。これによって言語史へ接近する理論的な1つの手掛りを確保したものと思う。

第2節の「言語の特質」は、一般言語学で扱う「言語の表象性」、「言語の線线性」、「言語の分節性と配列性」をコンパクトにまとめて示したものである。

第3節の「言語変化の要因をさぐる」は、(1)「言語の伝達形態」の面から、世代間、集落間における言語変容の仕組を諸方言を例示しつつ解説し、(2)「文化の変容」の面から事物の廃亡と世代間の言語残存率を統計的に示しつつ、時代的に言語の変化していく姿を活写している。そして(3)「言語使用の変化」の面から、社会の発展に伴ない地域言語のみの

生活から共通語生活化の過程で言語変化が進む現象を模式的に述べ、(4)「地理的、文化的な条件」から、つまりコミュニケーションを阻害する山、川、海の自然条件や買物圏、通婚圏、行政区画、旧国境等の社会、歴史的条件によって方言化が進むことを述べている。

第2章「言語研究の2つの方向」は、従来の言語学史をまとめて示したもので、特に著者の創見によるものではないようである。

第3章「音声から音韻へ」は、著者の得意とする分野だけに、構造的分析が緻密である。第1節「音節および拍という単位」では、母音の定義から始まって、母音を生成する調音上の仕組み、子音の定義、およびその変種、それらの調音上の特徴を詳細に解説している。

こうして得られた単音がそれぞれ結合して音節を形成し、拍（モーラ）を形成する仕組みや音素を抽出する手続き（最小対立・相補分布）などを、日本語例を用いて解説している。その結果・日本語の言語単位は「拍」にあることを述べ、百1個の拍体系を示し（第2節）、これらの拍体系を構成する音素を、母音音素（5個）、半母音音素（2個）、子音音素（13個）、拍音素（2個）の22個を抽出し、その素性を調音点（一次的特徴）、調音方法（二次的特徴）、声帯振動の有無（三次的特徴）の上から分析して示している（第3節）。第4節は、言語音をつくりだすのに関与する音声器官を国際音声字母表（I・P・A）を用いつつ解説したもので、いわば音声学の解説部分に相当する。

以上のような近代言語学的方法を古代日本語に適用するとどうなるか。この問題を扱ったのが第5節である。『古事記』（712年）、『日本書紀』（720年）、『万葉集』（759年）等の万葉仮名で表記された資料を分析して得られた「上代特殊仮名遣い」（橋本進吉）の研究を紹介解説し、キ、ヒ、ミ、ケ、ヘ、メ、コ、ソ、ト、ノ、モ、ヨ、口の13音と、その濁音ギ、ビ、ゲ、ベ、ゴ、ゾ、ドの7音の2種の書き分けが音韻的なものであることを述べている。この研究を受けて「古事記に於けるモノの仮名の用法について」（有坂英世ら）が母音調和の名残りであることや、上代語の「母音交替」の現象など、上代日本語の音韻的特徴がまとめられている。

第6節は「独特な日本の文字体系」が扱われ、第七節では、「音韻の時代層と地域変容」のテーマのもとに、(1) 上代特殊仮名遣の消滅過程、平安時代の国語音韻の体系を示し、(2) あめつちの詞（970年以前）、(3) たるにの歌（970年）、(4) いろは歌（1079年）、(5) 五十音図（『孔雀経音義』付載、1004～1028年）、(6) 音便現象、などの変遷を述べている。これら国語音韻史の諸現象を現代日本諸方言の音韻現象と結びつけて解説しているところは、著者の持ち味が十分に発揮されたものと言えよう。(7) 4つ仮名の区別の崩壊とその要因や、「音素についての変容」の項で扱われる、①母音の変化、②連母と長母音がハ行転呼音によってその位置を占めるようになったこと、また、③拗音の発生、④ハ行転呼音と諸方言の関連、⑤カ行音の変遷、⑥タ行音の変遷、⑦サ行音の変遷など、これらは全国的な方言調査に基づく豊富な資料に支えられているだけに説得的である。

第4章は「語彙と意味を考える」のテーマで、ことばの外形（音形）に対する内容（意味）の側面の研究方法をまとめている。語の集まりを語彙と規定し、概念と概念の張り合い関係で存在していると説く。そして張り合いの関係を意味分野とし、何らかの意味特徴を共有している語同士を類義語と規定する。また、類義語のもっている意味特徴のうち、ただ一つの特徴だけが反対（逆）の意味を示している場合、これらの語同士を反義語と規定する（第1節）。この基準をもとにして、第2節「さまざまな語の分類」では、（1）語の外形から、「いろは」順による分類（明治以降の五十音引き辞書）や、音節（拍）数による分類、動詞の活用形（四段活用、上一段活用、上二段活用、下一、二段活用、変格活用）、形容詞のク活用やシク活用による分類を示している。（2）「語の意味から」では、意味分野や意味領域を形成する意味特徴を基準に、その親疎関係によって分類する方法が示されている。

第4節語彙の意味現象では、（1）「意味現象のいろいろな姿」を各地方言で例示している。共通語の「着る」は、高知方言では「衣服を身にまとう」の意味だけでなく、帽子など頭部に「かぶせる」、傘などを「さしかける」意にも用いられ、共通語の「こける」は「転ぶ、倒れる」の意だが、高知方言では「落ちる」が中心的意味となっているというような、方言による意味のずれ現象を分析している。

このような意味のずれ現象には型が認められることをつきとめ、これらを、（2）意味現象の型の項で、①意味の狭まり現象、②意味の広がり現象、③意味の転移現象、として整理している。

第5節「意味をどのように分析し記述するか」では、意味の構造的分析法を提示し、類義語の比較による示差的意味特徴の対立を抽出することを重視している。

第6節名詞語彙では、身体部位をあらわす語彙が、人間の行動、態度など、さまざまな比喩的意味、用法にひろがっている点を、（1）「あたま」（頭）、（2）「くち」（口）、（3）「した」（舌）、（4）「て」（手）などの語を分析して示している。

第7節動詞語彙の意味分析は著者が長年にわたって力を入れて分析しただけに、独創的な面が多い。動作性動詞について、ある意味特徴を設定し、さらに下位分類をほどこして、（1）破碎動詞類（わる、くだく…）、（2）切断動詞類（きる、たつ…）、（3）研磨動詞類（とぐ、みがく）、（4）脱離動詞類（ぬく、むく…）、（5）曲撓動詞類（まがる、たわむ…）、（6）萎縮動詞類（かれる、しおれる…）、（7）伸脹動詞類（のびる、ふくれる…）、（8）練合動詞類（ねる、こねる…）、（9）融解動詞類（とける、とろとろになる…）に分類し、意味特徴を分析して。この方法を各方言に適用することで、意味項目の広狭の様相を図式的に示している。

第8節形容詞語彙では（1）「動詞の意味と形容詞の意味」において、形容詞が文の述語となる。①連体修飾語となる。②連用修飾語となる性格から、日本語の形容詞は、かなり動詞寄りになっていると指摘する。動詞と形容詞の反義語の関係がそれを証明するという。動

詞が主として推移的、動的なものを表すのに対し、形容詞が静的な性質、状態を表すことから、形容詞の意味特徴のひとつとして、判断の基準のとり方が重要と分析している。この視点から、次元をあらわす形容詞の(1)「たかい」(高)と「ひくい」(低)の中心的意味を「地面から垂直に上方へのびている長短の大きさが、基準より大であること」(高)と、「基準より小であること」(低)のように分析してる。こうして、(2)「ふかい」(深)と「あさい」(浅)、(3)「とおい」(遠)と「ちかい」(近)、(4)「ながい」(長)と「みじかい」(短)、(5)「ひろい」(広)と「せまい」(狭)、(6)「ふとい」(太)と「ほそい」(細)、(7)「あつい」(厚)と「うすい」(薄)、(8)「あらい」(粗)と「こまかい」(細)、(9)「おおきい」(大)と「ちいさい」(小)の意味を分析している。

3.「温度をあらわす形容詞」では、感覚形容詞(1)「さむい」(寒)、(2)「つめたい」(冷)、(3)「すずしい」(涼)、(4)「ぬるい」(温)、(5)「あたたかい」(暖・温)、(6)「あつい」(暑・熱)の意味分析がなされている。

第5章「言語表現と文」では、言語活動の場の分析、文の定義と種類、文の構成、主語と述語、連体修飾語、連用修飾語、動詞のアスペクト、他動詞と自動詞、動詞の活用、形容詞の活用等が扱われている。

第6章は、「方言の世界」と題し、日本語がどのようにして日本列島各地に波及していったかについて、方言圏論の立場から説いている。著者は、これを「波及」という用語で表現している。本章の「3. 日本の方言区画」は、「琉球方言の区画」に重点を置いて示している。

著者の豊富なデータをもとに、琉球方言を北琉球と南琉球に分け、北琉球を奄美と沖縄に下位区分し、南琉球を宮古、八重山、与那国に区分して示した点独創的であり、説得的である。